



第2号

2008年9月1日発行

兵庫県立洲本高校同窓会
東京支部

母校についてのいくつかのホットな話題

同窓会長 三根 一 乗

活発な活動をされておられる東京支部の皆さまに敬意を表するとともに、厚くお礼を申し上げます。今回は母校に関するホットな話題のいくつかを紹介させていただきます。

淡路の野球事情

平成二〇年度全国高校野球選手権大会(夏の大会)は、第九〇回の記念大会として、兵庫県からは二校が全国大会に出場できることになりました。梅雨明けの炎暑の中、東・西に分かれて県下の高校生が熱戦を繰り広げました。わが洲本高校は西兵庫大会で連戦連勝、七月二五日、県立加古川北高校との決勝戦で惜しくも二―五で敗れました。同窓会では、優勝を予定して「洲本高校野球部へのご支援をお願い」の予定原稿を作成していましたが、ついに日の目を見ませんでした。

さて、現在高校野球やプロ野球で活躍している方はリトルリーグ出身者が多いといわれます。つまり中学時代から硬球に慣れ親しんできた人たちです。この淡路で「中学校から硬球で野球を」を実践してきたのが鎌田実君(洲高九期)です。鎌田君は往年の阪神タイガースの名二塁手。その鎌田君が、平成一四年一月「淡路少年硬式野球KBクラブ」を結成して、県立淡路佐野運動公園を拠点にして、島内の中学生に対して毎週土・日曜日、祝祭日を中心に年間一四〇日の指導を行っています。ところが、中学校側は、身体発達途上にある中学生が硬球を使うことは、筋肉・靭帯・腱の発育を損なう恐れがあるととして反対しています。ですから、KBクラブに参加する中学生は学校では、他のクラブ例えばサッカー部とかバレー部に属して、休日にKBクラブの練習に駆けつけるという状態が今も続いています。あ

そうした中であって、KBクラブは順調な発展を遂げていてご同慶の至りです。そして、別の人が近々KBクラブと同じ趣旨のクラブ組織を立ち上げると聞いております。それでは、この硬式野球教室が洲本高校野球部にとってプラスになっているかという点、むしろその逆になっている可能性があるのではと。これは、一つはKBクラブがリトルリーグで好成績をあげるに従って、全国の高校野球の関係者から激しい勧誘工作があり、島外の高校に進学する例が後を絶たないこと。もう一つは、洲本高校の偏差値が高く、せつかく有望な選手が洲本高校への進学を希望しても、学力のハードルを越えられずに進学がかなえられない事例が多いというのです。洲本高校では県教育委員会が認めたスポーツ選手の優先枠制度があるのですが、歴代の校長でこの制度に則って生徒を合格させた方はいません。理由は、この情報公開の時代に「学力試験の順位を変えてまでして野球選手を合格にする合理的な理由が見出せない」と言われます。こんな環境の中で今回の決勝進出でしたから、「よくやった」、「よくやってくれた」の聲がなおさら大きいのです。捲土重来を期待いたします。

島内高校の学級削減騒動

目下、淡路圏域では、高校の学級数削減で大揺れに揺れています。平成二一年三月に島内の中学を卒業する生徒数が例年に比べて二〇〇名減となることから、兵庫県教育委員会は、島内の公立高校で四学級減らすことを打ち出しました。真っ先に槍玉に挙げられたのが、淡路市にある洲本実業高校東浦校と淡路高校一ノ宮校。それぞれ一学級減となるのがすでに決定されています。焦点はあとの二学級削減がどこになるのか。淡路市はすでに二学級減となっているから津名高校は安泰。となると、南あわじ市で一学級減、洲本市で一学級減となるのが自然ではないかというわけです。南あわじ市は淡路三原高校一校しかないから、淡路三原高校が一学級減。洲本市ではどうか。洲本実業高校は四学科(機械科・電気科・商業科・国際ビジネス科)それぞれ一学級で編成されており、学級減は困難。となると、学級減は洲本高校に白羽の矢が立つのは必至であろう、というのが一般的な見方です。

こんな話を記したのは、島内の公立高校はすべて横並びであるということ。普通高校で言えば、洲本市に在住する生徒が多く進学する洲本高校、南あわじ市と淡路三原高校との関係、淡路市と津名高校との関係も同様であって、淡路圏域にある洲本高校、淡路三原高校、津名高校ではない。つまり、この三つの高校の間には地理的環境を除いては、すべて同列なのです。学級減を例にとれば、三学級減の場合は、三市がそれぞれ一学級減。一学級減、二学級減の場合は、おそらくは学齢生徒の少ない順に減じてゆくのでしょう。そこには、学校の歴史・伝統・学風、規律・学校運営の状況、進学の実績などは一切考慮されないことが今回の一連の騒動の中で明らかになったのです。「淡路に冠たる洲本高校」を主張すべきか、四つある横並びの公立普通高校の一つであることで良しとするのか、私の心は揺れます。

一一月の支部総会でお目にかかれることを楽しみにしております。

(高校九期)

株式会社 ユニシップ

外航海運代理店業・海運仲介業・国際複合物流業

取締役社長 岩井 道人(昭和27年)

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-3-5 共同ビル7F
TEL:(代)03-3662-6511 FAX:03-3662-6522

株式会社 フォルツァ

JAL国際線の機内食を中心に広くご愛用いただいております。
納豆の栄養をそのままに!! 元気スナック「どらいなっとう」

代表 田中 万陽(昭和27年)

〒102-0071 東京都千代田区富士見1-12-1
TEL:03-3263-7331 FAX:03-3263-7657



交遊抄二題

森田 武

日本経済新聞の終りの頁に交遊抄というコラムがある。小説欄の直ぐ上にあることもあって永く続いている人気欄でもある。私はこれに二回寄稿した。一回目は銀行の役員時代の一九八四年「淡路ロマン党」というタイトルであり、二回目は二〇〇一年の「反骨の明治人」というタイトルで明治学院の理事長の時であった。双方共洲本中学に関係する内容なのでこの機会にその背景を説明させていただくことにしたい。

「淡路ロマン党」は洲中四一期の四人の仲間、入学以来、格別に親しく交際してきた者達である。この四人組の一人は既に亡く、一人は病気であるため、最近会えたのは堺市で今も現役の医師をしている熱血漢、泉寛君のみである。彼とは昨年は洲本で、今年は東京で久しぶりの歓談を尽くした。生きている限りまた会う約束である。ロマン党と称したのは、大正生まれに共通する価値観を持ち、子どもの時は自由な雰囲気でありながら、段々と戦争の足音が大きくなると共に社

会も学校も戦争に便乗した事大主義や事なかれ主義の風潮が強くなることに不満を持ち、これらを批判することに共感を覚えた仲間だったからである。もともとロマン党というのは交遊抄寄稿に際して私が命名したものである。

私は洲本中学に六年間在籍した。四一期生として入学し、三年生を留年して四二期生として卒業した。三年生の夏、微熱が出て医者に見てもらうと、肺門淋巴腺炎という曖昧な診断でしばらく静養するよう勧められた。そこで親戚にあった夏目漱石や芥川龍之介の全集をすべて耽読し、中途半端な文学少年になりかけた。そして学校に行くのが嫌になり、休学届を出して留年することとした。しかし、一年下の者と一緒になるのも馬鹿らしいので、専検(今の大検に相当)を受験して上級学校に進学しようと考えた。しかしよく調べてみると、専検は中学の全科目の合格を要し、留年よりも早く進学するのは相当難しいことがわかった。更に一年遅れると、大学にお

ける徴兵猶予の恩恵も期限切れになるかも知れぬ。そこで観念して、三年生を留年の形で四二期の諸君と合流したのである。中学時代の友人は二、三年生の時に出来る。従ってその後も親しく付き合ったのは、前記の三名を含め四一期の者達であった。

四二期での交友の例外は、本年逝去された大西実君である。彼は旧制山口高校から東大を出て、富士写真に入社し、社長、会長と上り詰めた同社の功労者である。同社のメインバンクが私の勤めた三井銀行あったから、取引関係を通じ、また個人的にもいろいろと相談し合う間柄であった。彼は四二期生の成績トップであった。私は洲本中学で最も不愉快だったのは、成績優秀者を妬む狭い根性の者が少なかつたことである。彼はしばしば上級生に呼び出されて殴られていたことを知っている。理不尽であり、卑怯であつて、今思い出しても腹が立つ。しかし彼は負けてなかつた。彼の経済界における活躍はこの理不尽な仕打ちに負けなかつた不屈の精神が大いに役立ったのではないかと信じている。

さて、交遊抄の二回目は二〇〇一年の八月に掲載された「反骨の明治人」という洲本中学の恩師山本保郎先生の思い出である。先生は私の亡母ハルと同年のお生まれで、神代村小学校のクラスメートであつた由、たまたまお会いすると「君の母親は秀才であつた」という思い出話をされるので、凡才の身の置き所に困るのである。先生は洲

本中学の体操の教師を永くされたあと、洲本市長二期等数々の要職をつとめられた。

私が「反骨の明治人」と強調したかったのは、当時の軍事教練に対する批判である。現役の陸軍将校が中学以上の学校に配属され、軍国主義の風潮を背景に横車を押ししていた時代であり、校長も弱腰であつた。しかし山本先生は怯まなかつた。先生は「軍事教練の速足は膝を痛めて健康上よろしくない。従って諸君は正常歩(膝を曲げず腰を水平に)を実行すべし」と強調され、教練の歩行を修正されたのである。当然不協和音があつたらしく、私共の卒業後しばらく県の方へ出向されたとのこと。いずれにしても軍国主義全盛のあの時代に、教え子の健康のため、敢然とご自分の信念を貫かれた先生の勇氣と信念を反骨のお手本として尊敬している。先生はこの記事を讀まれて大変喜ばれ、御礼状も頂いた。その翌年一〇〇歳で逝去されたので、私としてはご生前にささやかな恩返しが出来たと満足している。

八〇歳を超えると足腰も弱くなり、歩行も青年期のようにスムーズにゆかない。そこで朝の散歩の時には、昔先生に教わった正常歩を思い出しながら実行するように努めている。「求而不被得、和而可不离」(友情は求めて得られず、和して離れず)。これが先生の信条であつた。

(中学四二期)

四国化工機株式会社

食品機械製造・販売。とうふで健康「さとの雪」とうふ製造販売

代表取締役会長 植田 英雄 (昭和33年)

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-26-5 日通人形町ビル4F
TEL:03-5847-0117

医療法人社団 三根医院

小児科・アレルギー科・内科

医師 三根 一乗 (昭和32年)

〒656-0026 兵庫県洲本市栄町2-26
TEL:(代) 0799-24-0030 FAX:0799-24-3750

洲高の文化を繋ぐ

魚谷 正彦

〈洲高の文化を身近に感じる〉

昨秋、母校の兵庫県立洲本高等学校創立一〇周年記念の行事に同窓会東京支部代表の一人として出席させていただいた。久々の洲本のやや静かな街の佇まいの中を、五〇数年前には誰もが身内であるような暖かい眼差しを送られて中学、高校時代を過ごしたことを思い出しながら会場に足を運んだ。祝辞や校歌斉唱など式典が進み、ユーモアあふれる笹野高史さんの講演を聴いた後、同窓諸兄弟との歓談の中でつくづくと感じたことがある。

それは母校の校風というよりはむしろ多くの知識人を輩出した土壌、洲高の文化を改めて身近に感じたことである。明治三〇年に洲本尋常中学校としてスタートして以来、幾多の変遷を経てなお建学の精神は生きていると思うが、それはひとり学校独自の気風だけではなく、風光明媚な自然や国生みの歴史、更には全島の政治・経済・文化の中心都市として栄えてきた城下町洲本の風土と相まって築き上げられた文化であろうと思う。

ここで人間誰しも生活の基準となる思想には多かれ少なかれ学んできた学校の文化が精神的な支柱になっている。そこで自分の中の「洲高の文化」を整理してみると「至誠心と自立心そして豊かな人間性」となる。そして同級の友は言下に「質実剛健」といった。ちなみに、旧制の洲本中学の校訓は「至誠・剛健・自治」の三訓であり、淡路高女のそれは「温和・純潔・慈愛・勤勉」

忍耐の五徳目であった。そして新制の洲本高校になって校訓は「至誠・勤勉・自治・親和」と改められたが「剛健」が消え、いささか寂しい。

最近の教育目標は「確かな学力の向上と礼儀正しく品格のある洲高生の育成」ときき。

〈時代の波に翻弄された併中二回、洲高四回卒業生といほつ会〉

昭和八〇九年生まれの私達は終戦の翌二一年春、男子は旧制最後の洲本中学に五〇期生として、女子は淡路高女に四五期生として入学した。占領下、食料難など社会不安と戦いながら授業が始まったが、軍国主義体制のもと皇国史観に基づく初等教育を受けてきた私達にとっては自由、民主主義の幕開けに呼応した新しい中等教育に加え、個性豊かな洲中の先生の講義は驚きであり新鮮であった。そして中学生生活が軌道に乗って二年に進級する昭和二二年突如新学制「六・三・三制」が制定され新制の中学、高校が誕生。私達は新制高校の併設中学生となった。ただ私達の場合、今「併中」といって強烈な印象があるのは、二三年九月に元の洲中と淡路高女が合併し初めて男女共学に胸をときめかしたことである。二四年三月卒業するまでのわずか七箇月間のことであった。高校は物部校舎、私たち併中単学年のみ汐見校舎でということも特別の思いをかきたせた。そしてまた新学制は無常であった。高校進学は学区制により洲高に進学する人、三原、

津名高校に進学する人と出会いは瞬時に別れとなったのである。悲喜交々であったが三熊山麓の校庭を行き交う風景は今も忘れることは出来ない。昭和二四年、併中時代という得がたい体験を経て洲高に進学。丁度この年にはドッジ・ラインが実施され日本経済も復興に向かう転換期にあり社会生活にも明るい兆しが見えてきていたように思う。街には「青い山脈」の歌が流れていた。

さて、以上のような時代の転換期に卒業した併中二回生と洲高四回生の集いを「いほつ会」と呼ぶ。いほは古語で五百の意で近藤保郎先生につけていただいた。会員約五百人は全国に散らばるが東京周辺には現在三九名が在住しており「東京いほつ会」と称して交流を重ねている。特筆すべきは「ゴルフ会」でメンバーは産業界で活躍した油井大三郎君や武田安弘君、現役では田中万陽君や岩井道人君など一〇名、浅川浩義君と私が世話役を任じて今年九月で一〇年、五八回目を迎える。幹事は持回りで毎回ほぼ全員が出席してプレーを楽しむが、母校を語り故郷や国の行く末を論じる場でもある。

〈洲本高校同窓会東京支部の結成〉

たしか平成一六年の秋であったと思う。ある会合で五回生の現支部長杭田保孝氏や事務局長の海道俊雄氏らから私になぜ洲高には東京に同窓会がないのか(他校は同窓会支部が活発)と強い問いかけがあった。いろいろと経緯があると聞くが私自身かねがね不思議に思っていたので早速大先輩の森田武氏ほか諸兄にご意見を伺い相談させていただいた。結果、幸い一年先輩の三回生には酒井克美氏や八木研次郎氏ら母校愛に燃える熱血漢が多

く「洲高同窓会東京支部」設立準備を率先してお引き受けくださることとなり平成一七年一月ついに設立総会の開催に至ったのである。そして初代支部長は近藤和美氏、事務局長に酒井氏が就任された。また、翌一八年には八〇有余年の歴史と伝統を誇る旧制淡路高女の東京地区同窓会(東京淡路会)が解散、当支部へ合流していただくこととなった。

なお、設立に際し学校当局や前同窓会長倉本昌明氏ほか幹部の皆様にご理解、ご支援をいただいたことと格別のご配慮をいただいた別府文子さんに心からお礼を申し上げます。

〈洲高の文化を次代に繋ぐ〉

昭和三〇年頃、東京淡路会会長は法政大学総長の大内兵衛先生であったが当時の淡路会は洲中、洲高の卒業生が多く洲高の同窓会のように縦の繋がりが強かったように思う。

私見ではあるが、凡そ人としてこの世に生を受けたからにはなさねばならぬ責務が二つあると思う。一つは社会のために尽くすこと。二つ目は命や文化を次代に繋ぐことである。自分さえ良ければ良い、今さえ良ければ良いという昨今の社会風潮に毒されてはならない。今こそ私たちは先人の築き上げた伝統を受け継いで新しい環境に適応した「洲高の文化」を創り次代に繋いでゆかねばならないと思う。新しい「洲高の文化」には知性や品格に加え、より強い国際性や活力を期待したい。

四年目を迎える「東京・洲高」が会員相互の交流や母校、本部と繋ぐ役割を果たすとともに「洲高の文化」を次代に繋ぐ場であることを祈りつつ。(併中二期、高校四期)

有限会社 **ナースネット**
NURSE*NET



開業ナースとして事業を運営しています。
医療・介護保険事業、コンサルティング、研修会開催など

代表取締役 **今村 真弓** (昭和47年)

〒114-0012 東京都北区田端1-22-5
TEL:03-5692-2070 FAX:03-5855-3745
E-mail:nursesnet@eos.osn.ne.jp

株式会社 **トレードピア**
株式会社 **トサイエンス・サプリ**

機能性食品原材料の輸出入・国内販売
および同製品の国内販売

代表取締役 **松下 祐治** (昭和40年)

〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 東京STビル7F
TEL:(代)03-5542-2010

